

<指導計画のとらえ>

(1) 長期の指導計画の考え方

年間指導計画は、1 年間の生活を見通した長期の指導計画である。子どもの発達や生活の節目に着目して、1年間をいくつかの期に分けて、それぞれの時期にふさわしい保育の内容を計画する。月齢差と個人差が激しい 3 歳未満児は、期の区分は、次の2つの視点が必要である。

- ① 発達過程を主体とする
- ② 園生活への適応過程(不安定な時期、安定する時期など)、季節の変化や行事などを考慮する

年間指導計画は、具体的な個別計画の基礎になる計画である。

(2) 短期の指導計画の考え方

3 歳未満児の保育は、個別指導計画に基づいた個別保育を基本とする。3 歳未満児は、一生涯の中で最も成長・発達の著しい時期であり、発達の特性として、個人差が大きいともいえる。毎日繰り返される生活の中で、保育者とのゆったりとした相互作用をとおして発達の課題を獲得していけるよう、一人一人に即した個人計画を原則として、月ごとの計画を目安に、子どもや季節、園の実態などにより、その区切り方に、長短の幅を持たせたい。

また、3 歳未満児の指導計画において特に留意しなければならないポイントは、子どもの主体的な活動である「遊び」が抜けがちになることである。本来遊びとは、子どもの興味・関心に基づく自発的行為なので、いろいろな場面で生まれ、いつ生じるかわからない。特に 0 歳児は自分の身体をおもちゃにして遊ぶ行為等が頻繁にみられるが、保育者等が子どもの姿に気づき、応答的に触れ合ったり、言葉をかけたりすることが大切である。そのため、この時期の子どもは、このような遊びをするかもしれないという予想を、計画として捉えておくことが必要である。

発達過程のとらえ

P.10～P.14 の「5領域でみる発達過程」は、指導計画を作成する際に「子どもの姿からはじまる」ことを意識化するため、5 領域という視点から表記することにより、各園の子ども一人一人の姿が捉えやすくなることに配慮し、明示した。(3 歳未満の発達区分は平成 20 年告示の旧保育所保育指針に基づき区分している)

今般の改定では、第 2 章「保育の内容」に、乳児保育(0 歳児)、1歳以上 3 歳未満児と記載されているが、全体としては、発達のことを安易にとらえないように、「養護」の考え方として「基本的事項」と「内容の取扱い」を丁寧に記述している。さらに解説書の各項に配慮すべき発達の視点について詳述され、年齢別が最重要ではないということを表現している。